

2022 年度共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究——人類史的視点から」

一般公開シンポジウム

「環北太平洋地域の先住民社会の先史、言語、文化」

プログラム・要旨集

開催日：2022 年 10 月 29 日（土）・30 日（日）

開催場所：国立民族学博物館第 4 セミナー室＋オンライン併用

主催：国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究——人類史的視点から」（2020.10-2023.3）

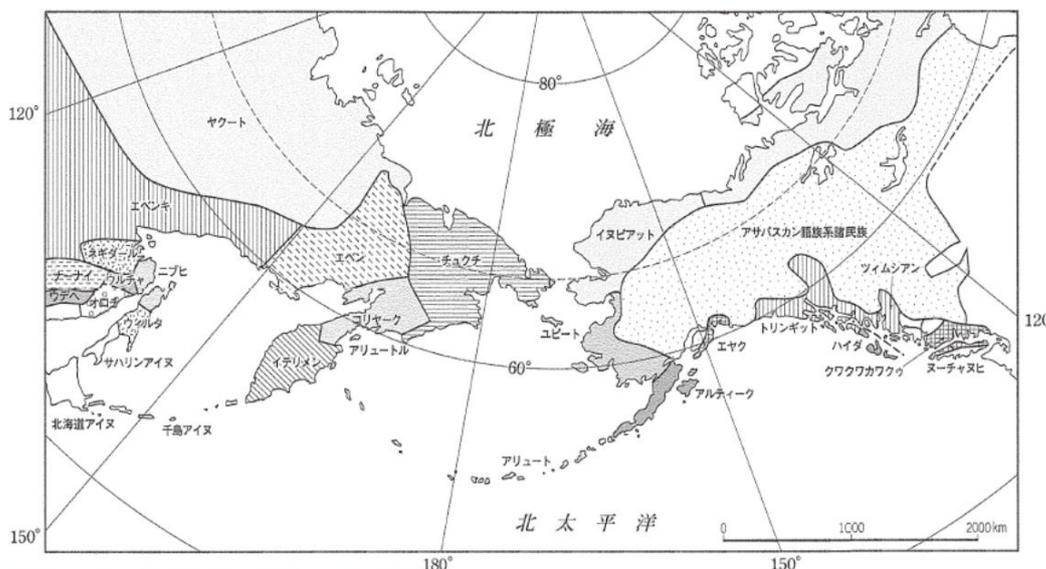
共催：科研基盤（A）「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」（2019.4-2024.3）

共催：日本北方言語学会

後援：日本カナダ学会、日本シベリア学会、在日本カナダ大使館

(趣旨)

環北太平洋地域の先住民社会の先史、言語、文化に関する体系的な調査研究は、アメリカ自然史博物館の F.ボアズが組織し、実施したジェサップ北太平洋調査プロジェクト (1897-1902) を嚆矢とする。同プロジェクトでは、新旧両大陸の北太平洋沿岸地域の複数の先住民社会において現地調査を実施し、その成果に基づいてそれらの文化や社会の歴史的関係性を解明しようとした。それは結果として多数の貴重な民族誌を生み出し、諸民族間の社会・文化的な類似性とともにも多様性を確認したが、諸民族間の社会や文化、言語の歴史的関係性を解明するには至らなかった。その後もアメリカや日本を中心に大小さまざまな調査研究プロジェクトが実施され、それ相応の成果が生み出されてきた。しかし、環北太平洋地域の先住民の社会・文化・言語の変化に関する比較が十分に行われておらず、社会的・文化的・言語的多様性の追認に終わっている。近年、分子生物学の成果を考古学研究に応用することや、言語研究や民族誌研究の成果が蓄積されてきたことによって、新たな知見が生み出されつつある。現在、行っている共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究——人類史的視点から」と科研「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」では、考古学や分子生物学、言語学、文化人類学の最新の研究方法や研究成果に基づいて環北太平洋沿岸地域における先住民の先史、社会、文化について多様な視点から検討を進めてきた。本シンポジウムの目的は、それらの成果を検討するとともに、広く社会一般に発信することである。



地図1 北太平洋沿岸地域の諸民族の分布地図

2022年10月29日(土)

10:00~10:20 趣旨説明 岸上伸啓(国立民族学博物館)

10:30~12:30 **言語学セッション(1)「環北太平洋地域の先住民諸言語における接触と変容」**

10:30~11:00 白 尚燁(室蘭工業大学)「地域言語学的観点から見たツングース諸語」

11:00~11:30 呉人 恵(北海道立民族博物館)「環オホーツク諸言語の接触の跡をたどる—古アジア諸語を中心に」

11:30~12:00 堀 博文(静岡大学)「北アメリカ北西海岸地域の言語領域と接触:北部を中心に」

12:00~12:30 笹間史子(大阪学院大学)「北アメリカ中部北西海岸言語領域とツィムシアン語族」

12:30~13:30 休憩

13:30~14:30 **言語学セッション(2)「環北太平洋地域の先住民諸言語における接触と変容:課題と展望」**

13:30~14:10 報告者によるコメント・補足説明

14:10~14:30 質疑応答・討論

14:30~14:45 休憩

14:45~17:25 **考古学セッション「環北太平洋地域の考古学」**

14:45~15:15 加藤博文(北海道大学)「環北太平洋考古学:冷戦期から新たな冷戦期へ」

15:15~15:45 平澤 悠(東亜大学)「北米ファーストアメリカン研究の現状と課題」

15:45~16:15 高瀬克範(北海道大学)「北太平洋東西沿岸の比較考古学——展望と課題」

16:15~16:25 休憩

16:25~17:25 質疑応答・総合討論

2022年10月30日（日）

10:00～12:00 文化人類学セッション(1)「環北太平洋沿岸地域の先住民社会の変化と現状」

10:00～10:40 齋藤玲子（国立民族学博物館）「近現代におけるアイヌ文化の変化と復興」

10:40～11:20 立川陽仁（三重大学）「カナダ、北西海岸先住民族の現代における起業とその背景」

11:20～12:00 井上敏昭（城西国際大学）「北方アサバスカン・グイッチン社会にとっての歴史－外部社会との関係史と「伝統」の意味」

12:00～13:00 休憩

13:00～14:00 文化人類学セッション(2)「環北太平洋沿岸地域の先住民社会の変化と現状」

14:00～14:15 コメント「変化と現状を比較する」 岸上伸啓（国立民族学博物館）

14:15～15:00 質疑応答及び討論

15:00～15:20 休憩

15:20～17:00 総合討論

コメント 加藤博文（北海道大学）、呉人恵（北海道立北方民族博物館）、岸上伸啓（国立民族学博物館）ほか

総合討論 全員

17:00 終了予定

言語学セッション「環北太平洋地域の先住民諸言語における接触と変容」

白 尚燁（室蘭工業大学）「地域言語学的観点から見たツングース諸語」

ツングース諸語は、ロシア領と中国領にまたがって分布する 11-12 の言語で構成されている同系の言語群を指す。このように広い範囲にわたって話されるツングース諸語は、コリマ・ユカギール語、チュルク諸語、モンゴル諸語、ロシア語、中国語などの多様な言語と隣接している。

本発表は、地域言語学的観点からツングース諸語を考察し、ツングース諸語の地域的分布と文法的相違の相関性を示すことを目的とする。研究方法としては、定動詞時制体系、定動詞述語における 3 人称標示、補助動詞、指示転換などの類型論的パラメータを取り入れ、ツングース諸語と周辺言語における言語接触の可能性を検討する。

考察の結果、ツングース諸語は、その地域的分布（北ツングース諸語、東ツングース諸語、南ツングース諸語）によって、異なる文法特徴が確認でき、それぞれ異なる周辺言語との類似性が見られることから言語接触による可能性を提起する。

呉人 恵（北海道立民族博物館）「環オホーツク諸言語の接触の跡をたどる—古アジア諸語を中心に」

コリヤーク語（チュクチ・カムチャツカ語族）は、「新旧両大陸の橋渡しの」言語と称されるように、北東アジアにありながら、北米先住民諸語と様々な点で類似性を有する一方で、環オホーツク沿岸地域の諸言語、とりわけニヴフ語やアイヌ語とも音韻・文法面での注目すべき類似性を有する。本発表では、名詞抱合、充当相、逆受動などの北東アジアでは稀少な現象を取り上げ、コリヤーク語をニヴフ語、アイヌ語と相互比較することにより、類似性の背景にある要因として言語接触の可能性を探る。合わせて、コリヤーク語よりも南に分布し、ニヴフ語やアイヌ語にも近いイテリメン語（チュクチ・カムチャツカ語族）のユニークな言語的位置づけについても考察する。

なお、考察にあたっては、一説ではニヴフが担ったとされるオホーツク文化、古コリヤーク文化、さらにアイヌが担ったとされる擦文文化の相互交流の痕跡を明らかにしてきた近年の考古学的知見を参照する。

堀 博文（静岡大学）「北アメリカ北西海岸地域の言語領域と接触：北部を中心に」

アメリカ合衆国アラスカ州からワシントン州・オレゴン州辺りに広がる北アメリカ北西海岸地域は、系統の異なる言語が多く密集するという世界的に見ても稀有な分布の様相を呈する。こうした系統的な多様性をみせる一方で、この地域の言語に共通する音声的特徴や

文法的特徴もいくつかみられる。その中でも、同地域の北部で話されるハイダ語、イーヤック語、アリュート語は、互いに系統関係がないにも拘わらず、その周辺の言語にはない特異な文法現象がみられることがリア (Leer 1991) によって指摘されている。

本発表では、まず、北西海岸文化領域に分布する言語の系統的・類型的多様性に加えて、それらの言語にみられる共通の特徴を概観する。更に、リアが提唱する「北部北西海岸言語領域」にみられる文法現象 (3 人称代名詞の無差別的数標示、迂言的所有構造など) を取り上げ、その周辺の言語とも併せて、歴史的・社会的要因について考察することを目的とする。

笹間史子 (大阪学院大学) 「北アメリカ中部北西海岸言語領域とツィムシアン語族」

系統的に多様な言語が密集している北アメリカ北西海岸地域において、音韻的・文法的類似が指摘されてきたセイリッシュ語族、ワカシュ語族、チマクム語族が「中部北西海岸言語領域」をなすという説がベック (Beck 2000) によって提唱されている。中部北西海岸言語領域にみられる特徴のうち、VSO を基本とする語順、第二位置クリティック、名詞述部などはツィムシアン語族にもみられ、この点においてツィムシアン語族は中部北西海岸言語領域に近いことが指摘される (Beck 2002)。

ツィムシアン語族は、中部北西海岸言語領域と、リア (Leer 1991) が提唱する北部北西海岸言語領域の間に位置し、中部北西海岸言語領域と共通の特徴をもつ一方で、文化的な面では北部のハイダやトリングットと深く関わってきた。本発表では、ツィムシアン語族と中部北西海岸言語領域との共通点を取り上げるとともに、ツィムシアン語族のユニークな位置づけの背景となった社会的要因について考察する。

考古学セッション「環北太平洋地域の考古学」

加藤博文 (北海道大学) 「環北太平洋考古学：冷戦期から新たな冷戦期へ」

環北太平洋沿岸地域は、アメリカ合衆国とロシア連邦 (旧ソ連) という二つの国家に隔てられている。本報告では、当該地域の研究の端緒を開いたピョートル大帝 (1682-1725) の主導によるシベリア開発とベーリング (1681-1741) やグメリン (1709-1755) やミューラー (1705-1783) らによる博物学的探検の時代、さらに 1917 年の 10 月革命以後のソ連の成立以降に急速に拡大するシベリア地域の研究の展開や研究動向を素描する。その上で冷戦期 (1945-1989) における政治社会情勢が遮断された中でオクラドニコフ (1908-1981) やチャード (1915-2002) らによって進められた研究の東西交流と共通の研究課題を確認したい。以上の学史的整理を踏まえた上で、2022 年のロシアのウクライナ侵攻がもたらした新

たな研究の分断の危機の中で、当該地域の研究課題が有する人類史的課題について検討したい。

平澤 悠（東亜大学）「北米ファーストアメリカン研究の現状と課題」

アメリカ大陸における人類集団の集団的および文化的起源は、欧州人と先住民との接触開始期から高い関心を集めてきた。近年、これまで最古に位置付けられていたクローヴィス石器文化の年代を遡る遺跡が大陸各地で報告され、北米では先クローヴィスという時期区分が受け入れられ始めている。古人骨や歯、糞石を用いた DNA 分析に基づく遺伝系統学的研究も大きく進展しており、後期更新世におけるシベリア、アジア、北米人類集団の遺伝的近縁関係と拡散過程が議論されている。現在までの考古学および分子人類学の成果から、少なくとも 16,000 cal BP 前後には北米に人類が到達したことが示唆されている。さらに、最終氷期最寒冷期の居住痕跡とされる遺跡の発見報告が注目を集めており、最初期集団の到来時期や拡散経路の見直しの必要性が高まっている。本発表では、これらファーストアメリカンをめぐる遺伝学的・考古学的研究の現状を整理し、移住仮説の課題点を析出する。

高瀬克範（北海道大学）「北太平洋東西沿岸の比較考古学——展望と課題」

北太平洋の東西沿岸は、更新世においては新大陸への人類拡散、完新世においては食料に恵まれた条件下における狩猟採集社会の展開過程への関心から比較対象となってきた。完新世ではサケ・マス論や階層化社会論という観点から検討されてきたものの、北太平洋東西沿岸の社会のあいだに直接的な文化的関係が想定されたり、両地域の社会が海洋生態系から関連した影響を受けたと考えられたりしてきたわけでは必ずしもない。しかし近年、多様なプロキシによって北太平洋の変化の理解が深まるにしたがって、その東西沿岸の人類社会が連動した影響をうけていたのではないかとの見方が出てきている。また、北太平洋の東岸では、遺跡出土の動植物遺体を人類の歴史解明だけでなく動植物や生態系の歴史解明にも利用しようとする歴史生態学の動きが活発化してきている。本報告では、これらふたつの研究トレンドの意義とそれらが学界にもたらす効果について考える。

文化人類学セッション「環北太平洋沿岸地域の先住民社会の変化と現状」

齋藤玲子（国立民族学博物館）「近現代におけるアイヌ文化の変化と復興」

今日のアイヌ民族につながる人びとは、長く狩猟・漁撈・採集と農耕を組み合わせた生業をおこない、本州やサハリンなど周囲に居住する民族と交易をしてきたことが、考古学や歴史学などにより明らかにされている。日本史の近世以降、自由な交易が制限され、松前藩に

武力で押さえられ、和人の経営する漁場で労働させられるようになり、生活を変えざるをえなくなった。

さらに、明治時代に入ると、本州からの移住者が増えてアイヌ民族は少数者となり、狩猟や漁撈が制限されて生活が困窮、伝統的な文化の継承が難しくなっていた。

しかし、現代、生業や衣食住などに関する物質文化をはじめ、和人との違いは表面的には見えづらいものの、信仰や言語は伝えられてきている。とくに 20 世紀末からは文化復興の動きが高まっている。

本報告では、北海道を中心にアイヌ文化の変化を概観し、北米の先住民との比較をするための情報を共有したい。

立川陽仁（三重大学）「カナダ、北西海岸先住民族の現代における起業とその背景」

カナダ、北西海岸の先住民族は、19 世紀後半から 20 世紀を通じ、サケ漁業に携わることで経済的自立を果たしてきた。しかし 20 世紀末にはじまるサケの減少により、先住民族は現金収入を得る他の方法を模索せねばなくなっている。この発表では、クワクワカワクウのあるクランによる現在の起業の試みと実態を報告しつつ、その上で、以下の 3 点――第 1 に、その新しい事業が可能になる条件は何か、第 2 に、その事業と漁業との間に何らかの関わりはあるのか、またその事業は漁業の代替物になる得るのか、第 3 に、そのクランの事業は、他集団にも参考になるものか――について若干の分析を加えたい。

井上敏昭（城西国際大学）「北方アサバスカン・グイッチン社会にとっての歴史－外部社会との関係史と「伝統」の意味」

北米大陸亜極北地域を伝統的生活圏とするグイッチンの社会は、西洋との接触以降、合衆国とカナダに分断され、それぞれの国家の下でマイノリティとしての社会状況を経験してきた。極北に位置するグイッチンの生活圏では、狩猟漁労採集文化を継続しうる自然環境は維持された一方、地下資源の開発や冷戦構造下での軍事活動の影響を色濃く受けることになり、かれらは両国の他の地域に居住する先住民社会とは違った歴史をたどることになった。

本発表では、接触当初の生活環境の変化から先住民権回復運動を経て現在に至るまでのグイッチン社会の歴史を、外部社会との関係に着目しながら概観し、分析を試みる。さらに先住民としてのアイデンティティ確立や権利主張の過程において、グイッチンがその正当性の根拠として重視する、西洋との接触以前の歴史・伝統との連続性や、現在の政治活動における他の先住民社会との関係構築についても取り上げ、考察する。